

Eugenio Garin: *Ermetismo del Rinascimento*

Roma: Editore Riuniti, 1988, 79 pp.

伊 藤 博 明

‘Biblioteca minima’ という叢書に収められた『ルネサンスにおけるヘルメス主義』は、エウジェニオ・ガレンが1986年11月にフェラーラ大学で行なった講演をまとめたものである。ガレンは、ルネサンス期イタリアの文化と思想の研究者として著名な人物であり、またすでに著作が四冊邦訳されているので⁽¹⁾、あらためて詳しい紹介をする必要はないであろう。経歴を簡単に述べると、1909年にラツィオ州のリエーティに生まれ、フィレンツェ大学で哲学を学び、そののち同大学で長らく哲学史を講じた。ついでピサのスクオーラ・ノルマーレ・スペリオーレに移り、最近までフィレンツェの国立ルネサンス研究所の所長を務めていた。専門分野に関する数多くの論文と著作のほか、統一後のイタリアの文化と思想を扱った著書も数冊刊行している。

本書は、1463年のマルシリオ・フィチーノによる『ヘルメス選集』(*Corpus hermeticum*)の翻訳、すなわち『ピマンデル』(*Pimander*)の成立に端を発する〈ルネサンス・ヘルメス主義〉という思想的潮流を、いくつかの論点にそって検討したものである。ルネサンスにおけるヘルメス主義の本格的な研究は、クリステラーによる1938年の論考から始まったのであるが⁽²⁾、ガレンも早い時期から関心を示していた。1937年に刊行されたピコ・デッラ・ミランドラに関する、現在もその意義を失っていない研究書において、すでにピコの思想におけるヘルメス文書の受容が論じられている⁽³⁾。1938年に発表した論文では、ジャンノッツォ・マネッティに始まる〈人間の尊厳〉論への「ヘルメス文書」の影響が論及された⁽⁴⁾。さらに1940年にガレンは、「ヘルメスの死」に関する記述が見られる『アルキドゥスの書』(*Liber Alcidi*)を詳しく考察し、サルターティなどのヒューマニストへの影響を明らかにした⁽⁵⁾。

〈ルネサンス・ヘルメス主義〉の研究史において画期的であったのは、1955年の、ルネサンスのヘルメス主義的哲学文献の刊行である。ルドヴィコ・ラザレリ、フランチェスコ・ジョルジ・ヴェネト、コルネリウス・アグリッパ・フォン・ネットスハイムのテキストから成る選文集の冒頭を飾ったガレンの序文的論考は、中世における『アスクレピオス』の受容からケプラー＝フラッド論争まで射程に収めた、短いながらも傑出した研究であったと思われる⁽⁶⁾。また同年に発表された、ルネサンスにおける魔術と占星術を主題とする論文も重要である⁽⁷⁾。

この領域におけるガレンの学問的貢献については、1964年に刊行されたフランス・イエイツ『ジョルダノ・ブルーノとヘルメスの伝統』の序において、クリステラーとD. P. ウォーカーとともにガレンの名が挙げられていることから瞭然であろう⁽⁸⁾。その後、ガレンはこの問題について主題的に論じることはなかったが、『哲学史批評雑誌』などで新しい研究動向に対してたえず鋭い指摘をしてきた⁽⁹⁾。そして、1983年に刊行された『古代哲学者の回帰』と題する著書で、ガレンは「最古の知恵とヘルメス主義」(La sapienza antichissima e l'ermetismo)に関して一章を割き、新しい知見を披露している⁽¹⁰⁾。

本書『ルネサンスのヘルメス主義』は、彼のこれまでの長い研究を踏まえた総合的な研究であり、例のごとく、テキストの自在な引用と巧妙な筆致が生み出す叙述は、読者に緊張を含んだ知的興奮を呼び起こさずにはおかない。80ページ足らずの小著ではあるが、その内容は濃密でレベルがきわめて高く、当該分野に関心のある研究者にとって不可欠の書物となるであろう。ただし本文には註がほとんど付されていないので、出典などはガレンの他の研究を参照して確認する必要がある。本書の「目次」は以下の通りである。

- 1 マルシリオ・フィチーノ『ピマンデル』の刊行 (1471年)
- 2 ヘルメス主義とプラトン主義
- 3 ヘルメス、エジプト、ナグ・ハマディ文書
- 4 14世紀と15世紀の間のヘルメス
- 5 15世紀における『ピカトリクス』の流布

6 ヘルメス主義的預言者の出現

7 フィチーノとピコにおけるヘルメス主義と魔術

8 16世紀に向けて——エピローグ

以下、今後の研究にとって重要と思われるガレンの議論を、五点にしぼって紹介することにしたい。

1) ヘルメス主義研究の第一人者であるフェステュジエールは、数多いヘルメス文書群を二つに分類している。第一群は、部分的には成立年代が紀元前三世紀まで遡る、占星術・錬金術・魔術に関連する文書で、それを彼は〈民衆的ヘルメス主義〉(l'hermétisme populaire)と呼んでいる。第二群は、紀元後2—3世紀に成立した哲学と神学に関わるもので、〈学問的ヘルメス主義〉(l'hermétisme savant)と呼んでいる。そして、後者を代表する作品が、ラテン訳で伝えられている『アスクレピオス』(Asclepius)と、フィチーノが訳出した『ヘルメス選集』なのである。

こうした〈二分法〉については、フェステュジエール自身も例外的な箇所のあることを示唆しているが、ルネサンスにおいてはほとんど有効性を要求しえなくなる。というのも、「至上の知恵のあらゆる形態」は、ルネサンスの人々に対して、「ヘルメスの秘儀というマントのもとに統一的なものとして」現われたからである。すなわち、「ヘルメス文書」の中に識別しうる、哲学的＝神学的教義と占星術的＝魔術的教義は截然と分離されるどころか、漠然と混淆されたものとして、あるいは緊密に結合されたものとして、否「一つの古代の知恵」として受容されたのである。この特異な態度こそ、ルネサンスのヘルメス主義を性格づけるものであり、ガレンが本書で目論んだのは、その諸相の解明に他ならない。

ガレンは、〈学問的ヘルメス主義〉文書においても、すでに占星術的＝魔術的傾向が見られることを指摘している。たとえば『ヘルメス選集』第16冊子では、エジプト人の聖なる言語のもつ力について語られている。それは、ギリシア人の「論証を生み出すための空しいもの」ではなく「活動力に満ちた」音声なのである。また、太陽に関連して占星術の〈基礎〉と言うべきものが表現されている。すなわち、太陽は星辰を介して宇宙を統轄し、この星辰に仕えているのがダイモンで、さらに人間はダイモン

に依拠している、と語られているのである。そして、『アスクレピオス』には、人間が「神々を創造しうる」ことについての、魔術的实践に関する周知の記述が見出される。今後は、こうした観点から「ヘルメス文書」を読み直す必要があるだろう。

2) ルネサンス思想における占星術と魔術の重要性については、夙にガレンが指摘してきたことであるが⁽¹¹⁾、他の研究者に先立って関心を傾注したのは『ピカトリクス』(*Picatrix*)と呼ばれる文書であった⁽¹²⁾。この中世アラビア起源の占星術的＝魔術的文献は、ルネサンス期のイタリアにおいてラテン語写本として流布していた。フィチーノやピコ・デッラ・ミランドラ、そしてカンパネッラに至るまで広く愛読されていたと考えられている。

ガレンが『ピカトリクス』においてとくに注目しているのは、〈完全なる自然〉(*Natura completa*)の概念である。〈完全なる自然〉とは「哲学自体の中に潜んでいる秘密」である。それは、〈哲学者の霊〉と言うべき存在で、哲学者はさまざまな段階においてこの存在に与っている。「〈完全なる自然〉は、あたかも弟子の前における師のごとく、智者と哲学者の中で振舞う」。ガレンは、この概念にヘルメス文書における〈ポイマンドレス〉との類似を指摘する。〈ポイマンドレス〉は、つねに弟子に伴う〈ヌース〉のごとき存在であった。それは、哲学者が自らの知性において懐抱する「神の権能に満ちたヌース」なのである。

『ピカトリクス』には、宇宙の秘密を解明した智者が、自然界で〈奇跡〉を行なうための、処方箋と言うべきものが書き記されている。その意味では、『ピカトリクス』を〈実践的魔術〉と〈降神術〉を説いている書物と見なしうるだろう。他方、フィチーノが『生について』(*De vita libri tres*)で描いているマグス(魔術師)像も、『ピカトリクス』における智者像に類似している。フィチーノによれば、宇宙(マクロコスモス)は、スピリトゥスに満たされた、いわば巨大な一個の生物体である。そして、スピリトゥスを介して身体と魂が結合されている人間(ミクロコスモス)は、この宇宙の言語を読み解くことができるばかりか、〈護符〉の使用によってその影響を左右するマグス的な存在なのである。ガレンは、今まで軽視されてきた『ピカトリクス』のフィチーノ(そしてピコ)への影響を強調している。待望のラテン語版『ピカトリクス』校訂版が刊行されたことでもあり⁽¹³⁾、この点に関するより深い研究が望まれる。

3) ヘルメス文書がすでに多くの読者を獲得していた1489年には、フィチーノの『生について』とともに、ピコの「ヘプタプルス」(*Heptaplus*)が刊行された。ピコによれば、他の被造物の場合と異なり、人間には万物の本性がすべて付与されている。驚くべきことに人間は、それらを自らの内で統一しているのであり、それゆえ「偉大なる奇跡とは人間のことである」というヘルメスの言葉が発せられるのである。そして、この人間に諸元素や獣のみならず、星辰も仕えるのである。ガレンは、ピコのこうした叙述に、典型的なヘルメス主義的〈マグス=哲学者〉像を見出している。たしかにピコによれば、「マグスは自然の最高の解釈者」であり、「魔術を実践することは、まさに宇宙を結婚させること」であった。

フィチーノも同様に、「自然的な事柄と星辰に精通した哲学者が、正当にもマグスと呼ばれる」と述べている。マグスは、適切な手段を用いて、農夫が古い株に若い芽を接木するように、天上のものと地上のものを結びつけるのである。ガレンは、ヤンブリコス『秘儀について』(*De mysteriis*)やプロクロス『供儀と魔術について』(*De sacrificio et magia*)をフィチーノが訳出したことに触れて、フィチーノの晩年の関心がヘルメス主義的魔術に向けられていたことを示唆している。『生について』に関しては、この著作中に認めうるヘルメス主義的要素と新プラトン主義的要素をめぐって目下議論が展開されているが⁽¹⁴⁾、最近刊行された、優れた校訂版に基づく総合的な研究が必要であろう⁽¹⁵⁾。

4) ガレンによれば、フィチーノによって主導された15世紀のヘルメス主義に特徴的なことは、「宗教的なテーマを宇宙に関する新しい概念と結合した」ことであった。このヘルメス主義においては、諸力に満ちた〈生ける宇宙〉というイメージの中で、実在界は〈象徴のシステム〉と理解される。ジョルダーノ・ブルーノは、こうした宇宙観を基底に新しい人間観を提出した代表的思想家であった。ブルーノによれば、マグスとは、宇宙をその深奥において読み取り、さまざまなレベルの言語を認識し、適切な手段を用いて諸事物と話し合い、諸事物を自らに従わせる者の謂である。〈ルネサンス・ヘルメス主義〉がもたらしたのは、このような宇宙と人間の関係についての新しいヴィジョンなのである。

興味深いことにガレンは、ある留保をつけながらもイエイツの主張を擁護している。

つまり、コペルニクスからニュートンに至る〈新科学〉に対するヘルメス主義の決定的な影響関係については否定するが、ヘルメス主義が科学の〈パラダイム〉の変更において重大な貢献を為したことを強く主張するのである⁽¹⁶⁾。別の論文でガレンは、いわゆる〈ヘルメス主義と科学革命〉に関する議論において、論者によってさまざまに使用される〈ヘルメス主義〉という概念の曖昧さについて批判している⁽¹⁷⁾。今後は、個々の思想家、科学者について、「ヘルメス文書」及びフィチーノらの教説との綿密な照合に基づいた研究が要求されるであろう⁽¹⁸⁾。

5) 最後に、本書で主題的には取り扱われていないが、評者にとって重要と思われる点を指摘しておきたい。ガレンは、いくつかの論考において、15世紀後半のフィレンツェを覆っていた〈革新〉(renovatio)への願望と希求について言及していた⁽¹⁹⁾。この願望と希求は、政治的にも宗教的にも混乱した状況下で生まれた、アンティクリストの出現と〈黄金時代〉の到来というアンビヴァレントな不安感と期待感に起因するものであった。そして、こうした時代の雰囲気とヘルメス主義とは無縁ではなかったのである。ガレンが本書で述べているように、「15世紀後半における、フィチーノおよびフィチーノ以降のヘルメス主義の興隆は……宗教的革新への激しい衝動を背景に、神学的ヘルメス主義と魔術的＝占星術的ヘルメス主義が緊密に結合する中で起こったのである」。

本書でも論及されているジョヴァンニ・メルクリオ・ダ・コレッジは、きわめて特異なヘルメス主義的預言者であった。彼は、1484年4月2日、ローマに奇妙な衣服を纏い茨の冠を被って現われた。そして、〈世界の終り〉を馬上から告知しながら、路上にパンフレットを撒き散らした。このジョヴァンニに影響されて熱烈なヘルメス主義者となったのがルドヴィコ・ラザレリである。のちに彼は、興味深いヘルメス主義的著作『ヘルメスのクラテール』(*Crater Hermetis*)——最近校訂版が刊行された⁽²⁰⁾——を執筆することになる。これら二人については、たしかに例外的な人物と見なすこともできよう。しかし、サヴォナローラの〈神権政治〉がフィレンツェに出現する前夜には、ヘルメスの教説に傾倒した、あるいは少なくともヘルメスから何らかの靈感を得た人々(ジョヴァンニ・ネージやパオロ・オルランディーニ)が〈革新〉と〈新しき時代〉(*novum saeculum*)について語っていたのである。フィチーノは、

『ピマンデル』の「序文」において、ヘルメスを哲学者として称讃するだけではなく、またシビュラと預言者たちの中に位置づけていた。こうした預言者としてのヘルメス、そして、宗教的〈革新〉に影響を及ぼしたヘルメス主義という側面についても、今後の研究の発展が望まれる。

本書『ルネサンスにおけるヘルメス主義』は、主として15世紀におけるヘルメス主義を論議の対象としている。ガレン自身が述べているように、16世紀には新たな問題が生じ、またパースペクティヴも変容する。現代の〈マクス〉と言うべきガレン教授が、再び16世紀におけるヘルメス主義について筆を取られんことを切に願うものである。

註

- (1) 清水純一訳『イタリアのヒューマニズム』（創文社）；近藤恒一訳『ヨーロッパの教育』（サイマル出版会）；清水純一・斎藤泰弘訳『イタリア・ルネサンスにおける市民生活と科学・魔術』（岩波書店）；ガレン編、近藤恒一・高階秀爾他訳『ルネサンス人』（岩波書店）
- (2) P. O. Kristeller, "Marsilio Ficino e Ludovico Lazzarelli. Contributo alla diffusione delle idee ermetiche nel Rinascimento," *Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa. Lettere, Storie e Filosofia*, Ser. II, VIII, pp. 237-262.
- (3) Giovanni Pico della Mirandola. *Vita e dottorina*, Firenze.
- (4) "La "Dignitas hominis" e la letteratura patristica," *Rinascita*, I, n. 4, pp. 102-146.
- (5) "Una fonte ermetica poco nota. Contributi alla storia del pensiero umanistico," *Rinascita*, III, n. 12, pp. 202-232.
- (6) "Note sull'ermetismo del Rinascimento," in *Testi umanistici su l'ermetismo*, 《Archivio di Filosofia》, Roma, pp. 7-19.
- (7) "Magia ed astrologia nella cultura del Rinascimento," *Berfagor*, V, pp. 657-667.
- (8) Frances A. Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, Chicago-London 1964, p. ix.
- (9) *Rivista critica di storia della filosofia*, XXVIII (1973), pp. 331-334 ; XXIX (1974), pp. 94-96 ; XXXI (1976), pp. 462-466 ; XXXII (1977), pp. 342-347 ; *Rinascimento*, Ser. II, XVI (1976), pp. 245-249.
- (10) *Il ritorno dei filosofi antichi*, Napoli, pp. 67-78.
- (11) "Considerazioni sulla magia del Rinascimento," in *Cristianesimo e ragion di Stato. L'umanesimo e il demonico nell'arte*, Roma-Milano 1953, pp. 215-224 ; "Le 《elezioni》 e il problema dell'astrologia," in *Umanesimo e esoterismo*, 《Archivio di Filosofia》, Padova 1960, pp. 17-37 ; *Lo zodiaco della vita. La polemica sull'astrologia dal Trecento al Cinquecento*, Roma-Bari 1982. Cfr. Nota (7)

- (12) “Noterelle di filosofia del medioevo,” *Giornale critico della filosofia italiana*, XXIX (1950), pp. 198-209 ; “La diffusione di un manuale di magia,” in *La cultura filosofia del Rinascimento italiano. Ricerche e documenti*, Firenze 1961, pp. 159-165 ; “Un manuale di magia : *Picatrix*,” in *L’età nuova. Ricerche di storia della cultura del XII al XVI secolo*, Napoli 1969, pp. 387-419.
- (13) *Picatrix. The Latin Version of the Ghāyat Al-Ḥakīm*, ed. by David Pingree, 《Studies of the Warburg Institute》, vol. 39, London 1986.
- (14) Cfr. Brian P. Copenhaver, “Iamblichus, Synesius and the *Chaldaean Oracles* in Marsilio Ficino’s *De Vita Libri Tres*: Hermetic Magic or Neoplatonic Magic?,” in *Supplementum Festivum : Studies in Honor of Paul Oskar Kristeller*, eds. by J. Hankins, J. Monfasoni and F. Purnell, Jr., Binghamton, N. Y. 1987, pp. 441-455 ; M. J. B. Allen, “Marsilio Ficino, Hermes Trismegistus and the *Corpus Hermeticum*,” in *New Perspectives on Renaissance Thought : Essays in the History of Science, Education and Philosophy, in Memory of Charles B. Schmitt*, eds. by J. Henry and S. Hutton, London 1990, pp. 38-47.
- (15) Marsilio Ficino, *Three Books on Life*, ed. and tr. by Carol V. Kaske and John R. Clark, Binghamton, N. Y. 1989. Cfr. Marsilio Ficino, *De vita*, a cura di A. Biondi e di G. Pisani, Pordenone 1991.
- (16) Cfr. Frances A. Yates, *Giordano Bruno e la cultura europea del Rinascimento*, Roma-Bari 1988, “Introduzione” di Garin.
- (17) “Divagazioni ermetiche,” *Rivista critica di storia della filosofia*, XXXI (1976), pp. 462-466.
- (18) Cfr. Michele Ciliberto, *La ruota del tempo. Interpretazione di Giordano Bruno*, Roma 1986.
- (19) “Desideri di riforma nell’oratoria del Quattrocento,” *Belfagor*, I (1948), pp. 1-11 ; “Paolo Orlandini e il profeta e teologa”, *Rinascimento*, I (1950), pp. 175-178 ; “Problemi di religione e filosofia nella cultura fiorentina del Quattrocento,” *Bibliothèque d’Humanisme et Renaissance*, XIV (1952), pp. 70-82 ; “Paolo Orlandini e il profeta Francesco da Meleto,” *La cultura filosofica...*, cit., pp. 213-223 ; “Il 《nuovo secolo》 e i suoi annunciatori,” *La cultura filosofica...*, cit., pp. 224-228.
- (20) C. Moreschini, *Dall’Asclepius al Crater Hermetis. Studi sull’ermetismo latino tardo-antico e rinascimentale*, Pisa 1986.